

# FOCUS Vol.14

長洲町でキラリ輝く人たち

「ものづくりは私の人生の一部」  
モノを再利用して新たな命を吹き込み続ける

いばらき ともえ  
**茨木 巴さん** (68歳 新山)



公民館で行われている「ものづくり教室」。参加者たちは茨木さんの説明に熱心に耳を傾ける。中には自宅まで作り方を聞きに来る人もいう。

「ものづくりを通して  
モノを大切に作る心を伝えていきたいですね」



▲家に飾られている作品の数々。全て茨木さんのオリジナルで作成したものばかり。

「モノがない時代で育ったから、なかなか捨てられないんです」。そう話し、笑顔を見せる茨木巴さん。部屋を彩る何百もの作品はすべて茨木さんが作ったもの。そして、作品の材料は普通ごみになってしまふものを再利用して作られている。

茨木さんが主に作る作品は、5cm×3cmに切った紙を細かく折り込み、それをつなぎ合わせで組み立てるもの。作品次第では、3000〜4000枚の再生紙が使用される場合もあるという。「何もないところから、自分でイメージしてそれが少しずつ形になっていく。それが一番の魅力ですね」と笑顔を見せる。

茨木さんが紙工作と出会ったのは50歳のとき。たまたま行った折り紙教室がきっかけだった。最初に作ったものは新聞紙を再利用して作った「ツル」。「昔のだから捨てようかと思うけど、思い入れがあって捨てられないんです。」とほほ

えむ。今では再利用しているものは紙をはじめ、空き箱、包装紙、梱包に使うテープなど、広がりを見せている。部屋に飾られている作品の土台には、タッパー容器が使われているほどだ。

「せっかくあるのに、そのまま捨てるのはもったいないことです。一見無駄に思えても、アレンジや考え方一つで色んなモノに変えることができます。そうやって光を当てると、モノは何度でも輝きます」。

今では自身の作品の製作の傍ら、小学生と一緒に折り紙をしたり、町事業の一環で公民館などに出向き、「ものづくり講座」なども行ったりする茨木さん。「自分が持っている知識や技術を通じて、皆さんがモノを大切にしてくれたらうれしいですね」。

これからも、ものづくりを通じて、モノを大切に作る心を私たちに伝え続けてくれることだろう。